

Fr.シラー：戯曲創作と人間形成（1）

松山 雄三

I はじめに

Fr.シラー（Schiller, Friedrich 1759-1805）の文化活動を概観するとき、大きく三つの分野、つまり文芸作品の創作、歴史の研究、美学哲学の研究に分けることができる。そして、シラーを、詩人と呼ぼうと、歴史家と呼ぼうと、あるいは哲学者と呼ぼうと、いずれも、シラーの文化活動の本質を言い当てていることになる。それほどに、シラーはこの三つの分野において、それぞれに、「偉大な頭脳のみひとり」(NA 25,6)¹になることができたのだ。しかも、いずれの分野においても、シラーが「人間であること」(NA 20,100)の真理を追い求めて、自他の人間的な心の育成を目指す姿勢を変えることはなかった。そしてシラーは理想的な人間の心のあり様を追究するとともに、現実世界での人間の生き様にも鋭い視線を注いでいることがうかがえる。

たとえば、『人間の美的教育について』*Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen* (1795)においては、シラー自身が述べているように²、I.カント（Immanuel Kant 1724-1804）の啓蒙思想を導きの糸として、かつシラーの人間形成論の代名詞ともいえる遊戯論の展開によって、人間の心情構造の神秘が探究され、高尚な人間像、清澄な心意状態の

¹ 次の略語を用いている。

NA: Schillers Werke. Begründet von Julius Petersen. Weimar (Nationalausgabe) 1943ff. 同全集からの引用と参照箇所については、文中に記す。なお、略語に続く二つのアラビア数字は、順に巻数と頁数を示す。

シラーは『ドン・カルロス』*Don Carlos* (1787年) を完成した後、作家として、所謂スランプに陥り、作家活動を断念して、歴史の研究に専心しようとする。ただし、友人 Chr.G.ケルナー（Christian Gottfried Körner 1756-1831）は反対の意を表す。引用箇所は、その時、ケルナー宛の書簡（1788年1月18付け）でシラーが述べた言葉である。「もしも私が偉大な頭脳のみひとりならば、私は私の歴史の分野で偉大な仕事を残すでしょう。[...] 私の詩的な春の花が枯れるときに、私が何で生きてゆくべきなのかを考えなければならないことは、正しいのでしょうか、間違いでしょうか。」(NA 25,6) この言葉は、歴史の研究に向けた意気込みの表白というより、作家活動の断念を決意しているシラーの複雑な心境を表している。シラーの当時の心境を思いやり、本論文中で引用している。

² 参照、NA 20, 309.

人間像が提示されるが、そのような理想的な人間のあり様を追究するに至った根拠には、凄惨な事態を招いているフランス革命に対する怒りと絶望感、そして危機感がある³。「人類のおおいなる運命が審理されているはずの政治的な舞台では」(NA 20,311)、シラーをはじめ、ヨーロッパ中の多くの知識人たちの期待に反して、民衆が獣性を剥き出しにし、人間狩りに明け暮れている。そこで、シラーは啓蒙の必要性を、以前にもまして強く、痛感したのだった。しかも、シラーが彼の人間形成論を告げる相手に選んだのは、革命の名のもとに殺戮を繰り返しているパリの民衆や、革命騒動の影響を受けやすい隣国、所謂領邦国家集団のドイツの民衆ではなく、貴族アウグステンブルク公であった。『人間の美的教育について』の起稿の契機が、そもそもアウグステンブルク公から寄せられた経済的な援助に対する謝礼の気持ちから、書簡を通じて行った「美と芸術についての研究成果」(NA 20,309)の開陳にあったからではあるが、支配層に属する人物に寄せた思想開示とその人物の教養意識のさらなる高揚を図ったところに、シラーの当時の心境を推察することができる。勿論、シラーが一般の人々の文化的啓蒙を等閑にしたというわけではない。たとえば、シラーが、人々の最もポピュラーな集いの場である劇場を「娯楽が教訓と、安息が勤勉と、慰楽が教養と結びつく施設である」(NA 20,99f.)と捉え、戯曲の創作に心を砕いていることから、あるいは、イエーナ大学教授就任講演『世界史とは何か、また何のためにこれを学ぶか』*Was heißt und zu welchem Ende studiert man Universalgeschichte?* (1789年)で、個人的な利害に囚われずに、すべての努力を知識の完成に向けて学問・研究に携わる学究の徒に「哲学的頭脳」(NA 17,362)の呼称を与えて称え、青年たちに学びの心を教示していることから、シラーの啓蒙の姿勢をうかがうことができる。

また、『人間の美的教育について』とほぼ同時期に執筆された『素朴文学と情感文学について』*Über naive und sentimentalische Dichtung* (1795-96)の執筆動機と目的も、日常化されている人工的な状態のなかにあって、何気なく、素朴な自然に接した折に、安らぎの気持ちが惹起される根拠を明らか

³ シラーはフランス革命の惨事を知り、次のように非難する。「聖なる人間の権利のことで力を尽くし、政治的な自由を戦い取ろうとするフランス国民の試みは、不可能なことと価値なきことを明るみに出ただけでした。そしてこの不幸な国民だけでなく、ヨーロッパの大部分をも、そしてこの世紀全体を、野蛮と隷従のなかに戻してしまいました。」(1793年7月13日付アウグステンブルク公〈Schleswig-Holstein-Augustenburg, Herzog von 1765-1814〉宛シラー書簡、NA 26,262)。

にし、近代人が不可避的におかれている自然喪失の状態のなかで、心の故郷を、過去に向けてではなく、未来的な方向で求め得る心的姿勢の涵養を図り、かつシラー自身を含めて近代の詩人（情感詩人）の使命を確認することであった。外界の自然と内なる自然との一体化、そして感性と理性の均衡ある状態から生まれる心の自然な状態のあり様を探り、心にその状態を招来することが目指される。厳密に云うと、心に自然な状態を復することが求められる。シラーは文化の使命について「そのような存在（外的にも内的にも一体化した存在）は、私たちがかつてあったところのものであり、私たちが再びなるべきところのものである。私たちは、それらと同様にかつて自然であった。そして私たちの文化は理性と自由の道を通して、私たちを自然へ連れ戻さなければならない」（NA 20,414 括弧内筆者注）と説く。シラーが近代の詩人、つまり情感詩人に「もはやアルカディアに戻ることでできない人間をエリュシオンにまで導く」（NA 20,472）牧歌の創作（＝文化の創生）を託したのは、過去の理想郷を空しく憧憬するだけでなく、理性の覚醒という経験を踏まえたうえで、自然な心の状態を取り戻せる人間が住まう未来世界の到来を願うからである。しかも、観念の世界への無限な飛翔によって、古の人々の素朴な心を凌駕する清澄な心のあり様が求められる。シラーは次のように述べる。

自然は人間を自己自身と一致させ、人工は人間を分割し分裂させる。理想によって人間は統一へ戻る。しかし理想は、人間が決して到達できない無限なものであるので、文明化した人間は彼の流儀では決して完全になれない。ところが、自然な人間は彼の流儀で完全になれる。それ故、完全性に関しては、両者が彼らの流儀と最高のあり様に対して持っている関係だけを考えるならば、文明化した人間は自然な人間より無限に劣る。これに対して流儀そのものを比較するなら、人間が文化によって到達しようとする目標は、人間が自然によって到達する目標より、限りなく優っている。それ故、一方は有限の偉大さの絶対的な到達によってその価値を保ち、他方は無限の偉大さへの接近によってその価値を得る。（NA 20,438）

人間は独り霞を食べて生きているわけではなく、良くも悪くも他（者）との関係のなかに立つ存在であることが、シラーによって失念されることはない。アリストテレス以来、たびたび説かれてきた社会的存在としての人間観、

直接的には A.ファーガスン (Adam Ferguson 1723-1816) や Chr.ガルヴェ (Christian Garve 1742-98) の道徳哲学と大衆哲学 Popularphilosophie の人間観をシラーは継承しており⁴、人間の手によって構築・組織化されている社会、所謂文明化された状態のなかに立ち、またそれとともに自身が文明化されてしまっている個的存在のあり様がシラーの関心から外れることはない。しかも、信仰心の厚い家庭環境や、幼年期を過ごしたシュヴァーベン地方で浸透していた敬虔主義 (Pietismus) の世界観から影響を受けた敬虔で道徳的な思考様式は、生涯に亘って、シラーの思想形成の根元のところで、関わっている。その証を、特に、シラーが取り組んだ戯曲創作にみることができる。そこでは、人間性を喪失してしまった社会の旧弊や人々の打算的な思惑に激怒する者、あるいは老獪で冷血な政治・宗教権力と対決し追い詰められてゆく者、歴史のうねりのなかで、あるいは人智では如何とも測りがたい超自然的なものの差配に翻弄される者など、実に様々な人間像が描き出されている。そして私たちは、様々な悲劇的な状況のなかで、人間的な生のあり様を追い求めて苦悩する人物の心に、私たち自身の心を重ね合わせ、生の指針を得る。生きること、「人間であること」(NA 20,100) について、人生の縮図を投影する有形無形の文化的創生を通じて、私たちは生の疑似体験をすることができる。シラーのこのような創造的姿勢を明確に表す言葉として、『悲劇における合唱団の使用について』 *Über den Gebrauch des Chors in der Tragödie* (1803 年) で述べられている次の言葉が想起される。

真の芸術は、束の間の戯れを目指すのではない。それはまた人間を暫時の自由の夢のなかに移すのではなく、まことに、人間を現に、実際に自由にする。また、芸術は、他の場合には粗野な素材として私たちの上に押し掛かり、目に見えない力として私たちを圧迫する感性的な世界を、遠方へ押しやって客観的ならしめ、私たちの精神の自由な所産に変え、そして質料的なものを理念によって支配する力を、人間のなかに目覚めさせ、練磨し、形成しようとする。(NA 10,8f.)

文化の創生は現実世界から乖離した低俗な夢想の戯れであってはならず、

⁴ シラーに影響を及ぼしている大衆哲学者としては、M.メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn 1729-86) と J.G.ズルツァー (Johann Georg Sulzer 1720-79) をも看過できない。

また現実世界の事象に関わっているからといって、事象の単なる羅列的な模倣によって刹那的な満足を与えるだけであってはならないことが説かれている。現実的なものの上に理念によって理想化されたものを打ち立てることによって、私たちの精神が現実的なものと高次の関係に立てるようにしなければならない。シラーが『人間の美的教育について』の第三書簡の初めで述べている言葉―「人間を人間にするということは、人間が単なる自然が作るところのものに留まらずに、自然が人間に関して先取りした歩みを、理性によって辿り直し、自然の所産を人間の道徳的な選択の所産に作り替え、自然的な必然性 (physische Nothwendigkeit) を道徳的な必然性 (moralische Nothwendigkeit) へ高める能力をもつようになるということである」(NA 20,313) ―が想起される。シラーは、歴史の研究を通じて、歴史の担い手のひとりであり、かつ歴史の流れに翻弄されがちな個人の存在の意義を探究し、そして美学哲学の研究を通じて、自由な心、つまり美的な心のあり様を追い求め、さらに文芸作品、特に戯曲創作を通じて、社会的存在である人間が現実の世界で生を享受するあり様を描きだし、私たちに人間に相応しく生きるといふことのモデルを示している。ただし、18世紀の啓蒙主義的な思考傾向が孕む目的論的な世界解釈を、シラーも継承しており、シラーが現実社会のなかで生きる人間の姿から視線をそらすことはないが、人間の心の奥底で蠢く獣性や得体のしれない魔的なものを暴き出すことより、むしろ高尚で理想主義的な論説を展開していることは確かである⁵。そこで、シラーが抱懐する人間形成の思想を、シラーの文化活動の一つである演劇活動―演劇観や戯曲創作―を中心に探ってゆきたい。

Ⅱ 前半生の戯曲創作と人間形成（『群盗』から『ドン・カルロス』まで）

シラーの前半生における戯曲の創作活動と、そこにかがえる人間形成の思想について考察を加えることから始めたい。シラーは 1781 年 5 月末／6

⁵ E.シュタイガーはシラーの立ち位置について次のように述べる。「シラーはある崇高な立場から話しており、その立場は理想と現実の生との中間に位置している。彼は目を上げれば、天の明澄な領域を見ており、目を下げれば、恐怖の現象を見ている。しかし、彼はそのどちらでも異邦人である。なぜなら、現象界では、彼は墮落に汚染されまいとする故に、異邦人であり、また天上界では、いかなる死すべき者にとっても、生きている限りでは、神々の若さを保つ不朽のバラが花咲くことはない故に、異邦人である。」 Emil Staiger: *Friedrich Schiller*. Zürich 1967, S.29.

月半ばに戯曲『群盗』*Die Räuber*を自費で出版し、翌年1月のマンハイム劇場での初演で伝説的ともいえる大きな成功を収め、現在の言葉でいうところの華々しい文壇デビューを果たすことができた⁶。その『群盗』の序文のなかで、シラーは演劇が与える感覚的効用について述べている。

戯曲方式はその世界をいわば現在のものとして (*gegenwärtig*) 描き、そして情熱や心の内奥の秘密の動きを登場人物たちの身振りや発言のなかで描出するので、記述形式の文学に比べて、一層強烈に作用を及ぼすし、生き生きとした可視的なものとして、既知の認識より力強い感じを与える。(NA 3,243)

後に、1797年12月26日付J.W.v.ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe 1749-1832) 宛の書簡のなかでも「戯曲作家は出来事を完全に現在として (*gegenwärtig*) 取り扱わなければならない」(NA 29,177) と述べていることから明らかなように、演劇が有する感覚的にリアルな描出作用を重視するシラーの戯曲創作の姿勢は変わることがない。そして青年シラーはこの演劇の特性を生かして、演劇を社会教育、道徳教育の用途に資し、人々の教養意識の高揚を図る。

最初の演劇論文『現代のドイツ劇場について』*Über das gegenwärtige teutsche Theater* (1782年) (以後、『第一の演劇論文』と呼ぶ) において、既に、シラーは演劇による社会教育、人間教育を説く彼の演劇論を展開している。シラーの論説を要約するならば、広大な自然を前にすれば、人間の眼は蟻の眼のように小さく、自然全体を一時 (ひととき) に見渡すことなど決してできない。そこで詩人が演劇の場を借りて私たちに現実世界の縮図を見せてくれる。しかも、詩人は、現実世界そのものの縮図ではなくて、「調和のとれた縮図でもって調和のとれた全体、部分のシンメトリーでもって全体のシンメトリーを用意し、部分のなかに納まっている全体を私たちに見せて驚嘆させる」(NA 20,83) と説かれる。シラーはアリストテレス以来の伝統的な演劇観に沿って、演劇を模倣芸術とみなす立場に立つが、事象の単なる縮

⁶ 『群盗』初演については、次の研究書を参照されたい。Vgl. Hrsg. von Axel Gellhaus u. Norbert Oellers: *Schiller; Bilder und Texte zu seinem Leben*. Köln/Weimar 1999, S.51f. Reinhard Buchwald: *Schiller; Leben und Werke*. Wiesbaden 1959, S.306.

小と羅列という形での模倣を行うのではなく、理性の応援を得て描出するものの調和化がなされてこそ、演劇はその使命を果たすことができる、と捉える。因みに、描出対象の調和化に寄せるシラーの芸術的関心は、後には、対象の理想化に近代詩人の詩的使命を説く芸術論の確立へと膨らみを増すことになる。なぜならば、ゲーテほどの素朴な詩的直観力には恵まれていないことを自覚するシラーは、理念によって彼の芸術的要請を訴える道を求めるからであり、「文明の状態にあつては、即ち、人間のすべての自然の調和的な共働が単なる理念である状態では、理想へ現実を高めること、即ち、理想の描写が詩人の仕事でなければならない」（NA 20,437）という認識に立つようになるからである。そして、シラーは「もしも真実と健全な自然の友が、ここに彼の世界を再発見し、彼自身の運命を他人の運命のなかで夢想し、彼の勇気を苦悩の場面で確認し、彼の感情を不幸な状況の際に鍛えるならば、演劇は十分に功績を立てているのです」（NA 20,86）と述べて、当該論文の結びの言葉とする。既に寸言したように、シラーが演劇を媒介として人々の教養レベルの向上を図っていることがうかがえる。

演劇の社会教育的かつ人間教育的効用を説く姿勢は、次の演劇論文『良い常設の演劇舞台はそもそもどのような影響を及ぼしうるか』*Was kann eine gute stehende Schaubühne eigentlich wirken?*（1784年、以後、『第二の演劇論文』と呼ぶ）において、さらに明確に示される。しかも、カール学院の卒業論文『人間の動物的本性と精神的本性の連関についての試論』*Versuch über den Zusammenhang der thierischen Natur des Menschen mit seiner geistigen*（1780年、以後『第三の卒業論文』⁷と呼ぶ）にうかがえる中正的な思考傾向が、『第一の演劇論文』に比べて、一層明確なかたちとなって表われ出ている。前記の卒業論文の緒論のなかで、シラーはエピクロス派の感覚的快樂主義に賛同するのでもなく、またストア派の厳格な道徳主義に従うのでもなく、「真実の中央線にますます確かに出くわすために、両方の説の均衡を保つこと」（NA 20,40）、両説の中間的な視点に立つことを明言している。中立的であること、そしてこの中立的であることのあり様を追究することが、シラーの生涯に亘る生の課題であった。後に、『人間の美的教育について』で展開される遊戯論と、『素朴文学と情感文学について』で説かれる牧歌論は、

⁷ シラーは次の三篇の卒業論文を提出している。『生理学の哲学』、『炎症熱と腐敗熱との相違について』*Über den Unterschied zwischen den entzündlichen und den fauligen Fiebern*（1780）、『人間の動物的本性と精神的本性の連関についての試論』。

「美的な状態」(NA 20,375)、「無垢の状態」(NA 20,467)の心情を理想とするシラーの思想的、かつ思考的特徴を表す典型的な論説である。また、そのような思考傾向は、早くも、シラーがカール学院に提出した最初の卒業論文『生理学の哲学』*Philosophie der Physiologie* (1779) (以後『第一の卒業論文』と呼ぶ)にもうかがえる。『第一の卒業論文』で、シラーは彼の思想傾向の特徴を表す中間力 (Mittelkraft, NA 20,13) 理念という仮説を立てたのだった⁸。時代が掲げる心身問題の論戦に加わる形で、シラーも人間の身体と心の連関について考察の目を向けている。シラーは次のように述べる。

物質 (つまり、その作用が表象されるべきもの) と精神との間に実際にある力が存在する。この力は世界とも精神ともまったく異なる。私がおの力を遠ざける。すると、精神に及ぼしていた世界のすべての作用はなくなる。それにもかかわらず、精神はまだそこに存在する。そして対象もまだそこに残る。その力の喪失は世界と精神の間に亀裂を生む。その力の存在は精神の周りのすべてのものを明るくし、目覚めさせ、生気を与える。私はそれを中間力と名づける。(NA 20,13)

この中間力仮説の措定の姿勢は『第二の演劇論文』でも継承されており、人間の二様の本性を仲介する働きをなす場として、「中間的状态」(ein mittlerer Zustand NA 20,90) の仮説が説かれる。

微妙な悟性の働きを続けることができないように、そしてそれ以上に、動物的状态を続けることができない私たちの本性は、ある中間的状态を望んだ。この中間的状态は互いに相対立する両極端を結合し、厳しい緊張を穏やかな調和に和らげ、ある状態から他の状態への交互の移行を容易にする。そして一般に審美感、即ち美しいものに対する感情がこの使

⁸ 中間力の仮説はシラー固有の説ではなく、シラーが同仮説を主張するにあたって、カール学院教授 J.F.アーベル (Jakob Friedrich Abel 1751-1829) の講義や B.ハウク (Balthasar Haug 1731-92) が主催する「シュヴァーベン・マガジン」に掲載された同仮説についての特集論文等からの影響が指摘されている。Vgl. Wolfgang Riedel: *Die Anthropologie des jungen Schiller*. Würzburg 1985, S.74ff. Peter-André Alt: *Schiller*. Bd.1, München 2000, S.160f. ただし、筆者は関係資料の不足からシラーの同仮説成立史に触れることができない。なお、中間力のテーマについては、次の先駆的な論文を挙げておきたい。新関良三：シラーの中間力理念の発展について。ゲーテ年鑑 第1巻。日本ゲーテ協会。1959年。175-193頁。

命を果たす。（NA 20,90）

前記の「中間的状态」に関する仮説において特記すべきことは、人間の二様の本性の調和的状态を惹起するものとして、「審美感、即ち美しいものに対する感情」、つまり芸術の鑑賞によって惹起される美感が考えられていることである。『カリアス書簡』⁹ *Kallias Briefe oder über die Schönheit* や『優美と尊厳について』 *Über Anmut und Würde*（1793年）など、後に説かれる一連の美学哲学論の萌芽が早くもうかがえる。ただし、『第一の演劇論文』と同様に、『第二の演劇論文』においても、説かれる演劇論は、純粋な芸術論として展開をみるより、むしろ演劇の実践的な効用、社会教育や人間教育の働きを明らかにすることに論点が向けられている。

また、国家の運営に寄与する法律と宗教に関連づけて演劇論が展開されるのも、シラーの社会教育的・人間教育的演劇観を物語っている。シラーは法律と宗教の社会的な役割について分析的に論を進める。「法律は否定的な義務のみを問題にし—宗教はその要求を現実の行動に広げる。法律は社会の結合を弛緩させる作用を防ぐが—宗教は社会の結合をさらに内的に緊密にすることを命じる。法律は意志の外化したものだけを支配し、行為だけが法律に服する。宗教はその裁判権を心の内奥の隅にまで及ぼし、そして思考を内奥の源泉にまで追い求める」（NA 20,91）と説かれる。しかし、シラーは『群盗』創作において明らかにした姿勢と異なり、法律や社会的慣習が示す規制や抑圧に対する反発を露わにすることはなく、法律や宗教が集団生活において果たす役割に理解を示す。そのうえで、「宗教と法律が演劇と結び付くときには、宗教と法律にとってなんという強化であろうか」（NA 20,91）、あるいは法律と宗教の守備範囲が終わるところから、人々の生を支えるものとして、シラーは演劇を持ち出す。シラーは舞台の上では「悪徳と徳、幸福と苦境、愚昧と英知とが人間について明白に真実にいろいろに描写されて、通り過ぎてゆく」（NA 20,91）と指摘する。つまり、演劇は人間に関するすべてのこと、過去のことも現在のことも、そして未来のことも、赤裸々に描出すること

⁹ 1793年1月25日から同年2月28日までの間、シラーはケルナー宛の書簡で美学論を展開した。当初、シラーはこれらの書簡の出版を企図するが、実現しなかった。1792年12月21日付ケルナー宛書簡でシラーは次のように述べる。「カントが絶望している美の客観的概念を、私は見出したと思っております。私はそれについての私の思想を整理して、カリアス、あるいは美についてという対話形式で、来るべき復活祭までには出版することになると 생각합니다。」（NA 26,171）

ができるからこそ、法律や宗教より一層強烈に私たちに影響を与える、と説かれ、「実践的な知恵のための学校であり」(NA 20,95)、「人間をして人間を認識させる」(NA 20,97) 場である、と明確に捉えられる。

またシラーは演劇が本来もつところの娯楽性についても蔑ろにすることはしない。むしろ演劇が有する娯楽性によって心に安らぎが招来されることを説く。シラーは次のように述べる。

人間の本性は、職業の責め苦に絶えず苛まれることに耐えられないし、感官の刺激は満足とともに絶える。動物的な快樂に浸り過ぎ、長い緊張に疲れ果て、果てしなく続く行動欲に苦しめられた人間は、洗練された娯楽を望むか、あるいは彼の没落を早め、社会の平穩を破る粗暴な気晴らしや放縦に飛び込んでゆく。[···] 演劇舞台は、娯楽が教訓と、安息が勤勉と、慰楽が教養と結びつく施設であり、そこでは如何なる心の力も他者の不利益になるほどには緊張しておらず、如何なる満足も全体を犠牲にして享受されることはない。(NA 20,99f.)

演劇は、「娯楽が教訓と、安息が勤勉と、慰楽が教養と結びつく」場として捉えられている。演劇は本来、心を和ませる娯楽性をもつからこそ一面的に、あるいは過度に、私たちの心を緊張させることもなく、人間本来の調和的な心意状態に復させる、と説かれる。

憎悪の念が心を蝕むとき、重苦しい気分が私たちの孤独な時間を毒するとき、世間と仕事が私たちに吐き気を催させるとき、[···] 演劇舞台が私たちを迎える。—この芸術(演劇)の世界のなかで、私たちは現実の世界を離れて夢想し、本来の自分自身に回復させられる。私たちの感情は目覚める。そして快癒した情熱は私たちのまどろんでいる本性を揺さぶり、そして血を新たに熱くさせる。(NA 20,100)

そしてシラーは、「個々人は強化され美化されて多くの人々の目から解放されて自分自身のところに戻ってくるあらゆる歓喜を享受する。そして彼の心はいまやただ一つの感情に対してのみ場所を与える—それは人間であること」(NA 20,100) と述べて、この演劇論を結ぶ。つまり、人々は、劇場において、日常生活における人間関係の桎梏から解き放たれ、また運命の気まぐ

れからも解放されて、「自然の聖なる源泉」（NA 20,100）に近づき、生来の自分自身に戻ることができる。この「人間であること」という言葉に、シラーの啓蒙精神が象徴的に込められている。

カール学院時代に、シラーは、神に寄せる敬虔な心や、同胞に寄せる人間愛に基づく自他超越の愛の哲学（*Liebe zur Glückseligkeit* NA 20,3）を説き、かつ完全なる神の境地に匹敵する精神の陶冶を目指す「神的相等性」（*Gottgleichheit* NA 20,10）の理念を掲げ、人間精神の至高の形成と至福な社会の構築を自他に要請したのだった¹⁰。シラーは、自然の営みのなかに神の完全な創造プランや不可侵の力の投影を見ようとする。「人間は、創造主の偉大さを獲得するために、存在する。[···] 神と同じくすることが人間の使命である」（NA 20,10）、あるいは「宇宙は神の一つの思想である。[···] すべての思惟する存在の使命は、この現に存在する全体のうちに最初の設計を見出すことにある」（NA 20,115）といった言葉が、青年シラーの論説に度々うかがえる。しかも、後に、シラーは『人間の美的教育について』において、本来、人間がそれ自身のうちで完成した全体であること、しかも神的な存在に通底する神性をうちに宿していることを説き、失われている全体性の回復を要請し、かつ信じている。

無限の本質、神性は決して生成しうるものではないけれども、神性の最も本来的な特徴、即ち能力の絶対的表示（あらゆる可能的なものの現実性）と現象の絶対的な統一（あらゆる現実的なものの必然性）とをその無限の課題とするような傾向は、やはり神的と呼ばなければならない。この神性への素質を、人間が自己の人格性のなかにもつことは反駁できない。（NA 20,343）

¹⁰ 「幸福への愛」と「完全性」の理念は、青年期シラーの世界観を代表する思想である。これらの思想は、特に『過度の善意、親切や大きな寛容も最も狭い意味において徳に属するか』*Gehört allzuviel Güte, Leutseligkeit und grosse Freigebigkeit im engsten Verstand zur Tugend?* (1779年)、『結果からみた徳』*Die Tugend in ihren Folgen betrachtet* (1780年)、『生理学の哲学』で述べられている。一・二番目の論文は、カール・オイゲン公（Carl Eugen, Herzog von Württemberg 1728-93）の想い人フランツィスカ・フォン・ホーエンハイム（Franziska von Hohenheim 1748-1811）の誕生日の祝賀会で、シラーが行った祝賀の講演である。三番目の論文は、シラーがカール学院に提出した最初の卒業論文であるが、思弁的すぎるとして、再提出を求められた。

軍人と官吏の養成機関であるカール学院での規則尽くめの生活ではあったが、多感な少青年期に、道徳哲学や大衆哲学の啓蒙思想に遭遇したことが、シラーの生涯に亘る生の姿勢を決定付けている。勿論、戯曲『ドン・カルロス』の完成後に陥った作家としての、所謂スランプの時期に、カントの歴史哲学と美学論から受けた思想的影響を看過することができないことは言うまでもない。

このように、青年期の演劇論文や文化論文では、幸福主義と完全性の思想に基づいた敬虔な心のあり様が問われる。そして青年期シラーの戯曲では、人間的な心を喪失してしまった世間や因習、そして政治体制との確執から、崇高な犯罪者である青年たちが描かれている。まさしく、演劇は現実世界を映す鏡の役を果たす。青年たちは人間的な生の奪還を目指し、自由であることを求めて雄々しく行動するが、内奥から沸きあがってくる熱すぎる衝動の先導によって彼ら自身も心の均衡を失っている。そこで、次に、これらの熱すぎる青年たちをはじめ、その他の人物たちの生き様について、暫時、考察を加えたい。

確かに、シラーが初めて発表した戯曲『群盗』は、青年シラーの熱い心を表している。戯曲の舞台とされたのはシラーの同時代のドイツであり、さらに先行研究によれば¹¹、当時さまざまに噂されていた盗賊団の話となれば、人々がこのロビンフッド系の劇を鑑賞して、舞台に喝采を送りながら、鬱積した気持ちを晴らしたであろうことは、容易に推測がつく。主人公カール・モールは人生の目的を見いだせずに、無為に日々を過ごしている学生であるが、放蕩三昧の生活に区切りを告げて、故郷に帰ろうとする。彼はドイツのある地方の小領主の倅であり、故郷では年老いた父親と恋人アマーリアが彼の帰郷を待っている。こうなれば、放蕩息子の筋書きが想起される。ところが、故郷に残る弟フランツの妨害により、カールの帰郷は叶わぬことになる。当時、蔓延りはじめた唯物論的思考に対する警戒からだろうか、シラーはフランツを劣等感の塊と化した血の通わぬ唯物論者に作り上げている。フランツはカールと違って思弁的な人物であり、彼が説く人生哲学はそれなりに関心をもたれる。対照的な性格のこの兄弟の対比も面白く、この兄弟の性格はシ

¹¹ 新関良三：フリードリヒ・フォン・シラー 生涯と著作。所収：新関良三編、シラー一選集（6）。東京（富山房） 昭和21年、203頁。

ラーの性格に潜む二面性を表している。ひょっとすると、私たちの心が抱える二面性でもあるかもしれない。さて、父親から帰郷を拒否されたと誤解したカールは、激怒と絶望の言葉をたたきつける。「人間だと一人間だと。偽りと偽善の皮を被った鱈の一族だ。奴らの目からは水しか流れない。奴らの心は石だ」（NA 3,31）、あるいは「おれが人間性に訴えたとき、おれの前から人間性を隠してしまったのは人間たちだ。だから同情と人間らしい思いやりを、おれから消してしまうぞ」（NA 3,32）といった言葉が、カールの口から度々発せられる。その挙句、カールは現状の生活に不満を抱く若者たち、しかも自堕落な生活に浸りきっていた学生や無頼の輩までも糾合して盗賊団を結成し、自らその首領に収まり、カールの意図によれば、世直しの行動に出る。しかし、そこは、急ごしらえの烏合の集団であるから、単なる暴徒と化す者も出てきて、カールを悩ます。カールにせよ、他の若者たちにせよ、彼らの反社会的な言動については、理屈に合わない独善的な姿勢がうかがえるが、何故かしら、喝采を送りたくなる。非支配層の鬱積した心を、作者シラーは見事に捉えている。そして「法律は、鷲の飛翔になったものを、蝸牛の歩みに墮落させてしまった。法律は偉大な男を創り出したためしはない。しかし自由は途轍もなく大きなことと極端な行為を生み出す」（NA 3,21）と訴えるカールの自由への憧れは、シラー自身の心の吐露でもあった。

ただし、シラーの心を、『群盗』の盗賊団の生活にうかがえるようなアウトサイダー的な反社会的行為、もしくは反抗精神にのみ看取するならば、それは啓蒙家シラーの精神を捉えそこなうことになる。カールが、固陋で抑圧的な因習や社会の仕組み、そして人々の非情な心に抗して、自由の奪還と人間的な心の回復を口にするとき、私たちは彼の挑戦的な言葉と行動に魅了されがちだが、それのみに酔ってはならない。確かに、見せ掛けの安寧の護持に終始し、革新的な営為を拒もうとする人々に、あるいは社会・政治体制に対して、青年シラーは厳しい非難の気持ちを抱いて対峙している。啓蒙の世紀の保護者として称えられた君主がいたとしても、18世紀のドイツの領邦国家において、それぞれの君主は絶対的な権力を握っており、そのような社会・政治体制のなかで、君主の慈悲にすがって生きることを求められた¹²平民の子シラーが、戯曲を通じて、社会批判、あるいは体制批判を匂わせたことは

¹² シラーは幼いころ、聖職者になることを望み、またそれは家族の希望でもあり、その準備のためにラテン語学校にも通っていたが、領主カール・オイゲン公の厳命により新設の軍人養成所（後のカール学院）へ入学せざるを得なかった。

驚くべきことである。『群盗』の初演は1782年1月に隣国のマンハイムの劇場で行われたが、当時、シュトゥットガルトの連隊付きの見習い軍医であったシラーは、この『群盗』初演を無断で観に行き、その咎で暫時の監禁と執筆禁止に処せられる。そしてその処分に対する不満から、1782年9月にシラーは故国を出奔するわけだが、その後、逮捕を恐れて2年数か月に亘る逃亡生活を送ったことを考えただけで、如何に君主が絶大な権力を持っていたかがうかがえる。『群盗』の随所で発せられる自由への憧れ、人間としての尊厳の回復への要求は、作者シラーの身を挺しての果敢な抵抗であった。

しかし、シラーが要請するのは、町を破壊し、人々に危害を加えて悦に入っている盗賊団が示すような非人間的な殺戮行為や破壊行為ではない。『群盗』演劇が惹起する所謂活劇的な小気味よさや気晴らしにだけ魅了されることなく、猛々しい盗賊団のなかにあつてカールが時折見せる自責の念、汎神論的な世界観、そして郷愁の念¹³に、私たちはシラーのもう一つの心を読み取らなければならない。そして何より、この戯曲が道徳的な贖罪劇として結末を迎えていることに、注意を払わなければならない。怒りに任せた反社会的な行動の結果として、父と恋人アマーリアを亡くしたカールは、「おゝ、おれはなんという愚か者だろう。残酷な行為によって世界を清め、法を無法によって正そうなどと妄想するとは！ [···] おれのような人間が二人もいれば、この道徳の世界のすべての仕組みを破壊しつくすだろう、とおれはようやく悟ったのだ」(NA 3,134f.)、と悔悟の言葉を吐いているのではないか。シラーは、カールの義憤の念と悔悟の念を通じて、現実の世界における自由な生き方への憧れを訴えるとともに、独善的な行為と自己陶醉に対する戒めも説いている。シラーはこの戯曲の序文で「私は私の作品に、その注目に値する結末故に、当然、道徳的な書物に加わる場所を約束してもよいだろう。悪徳は、相応の出口を見出す。過ちを犯した者は再び法の軌道に戻る」(NA 3,8)と、この戯曲の創作的意図について述べている¹⁴。マンハイム劇場での『群盗』

¹³ 例えば、『群盗』の第3幕第2景ドナウ河畔の場を挙げることができる。これまでの自分の所業を省みて、カールは述べる。「おれは人間を見てきた。ちっぽけな不安や、巨大な構想、神々しい計画、取るに足らない仕事、幸福を求める壮大だが奇妙な競争を―人生の様々なくじを見てきた。そのなかで、当たりくじをもぎ取るために、純潔を賭け、天国を賭けてくじをひいてみると、結局、当たりくじはないのだ。これは芝居だよ、兄弟。おかしくて腹の皮がよじれそうになりながら、目には涙をさそう芝居だよ。」(NA 3,78)

¹⁴ P.アルトはこの序文を指して、「シラーの序文が作品の真髓を簡潔に説明している」

初演については、感激のあまりにむせび泣く、あるいは歓声を上げる観衆の様子が伝えられているが、序文で述べられているシラー自身の言葉を再度検討することが必要である。もっとも、作品内容の反社会的・反体制的な展開故に、シラー自身が為政者側の怒りや妨害に対して予防線を張っている面もうかがえることは否定できない。こうしてみると、確かに、先行研究で指摘されているように¹⁵、『群盗』は一義的な解釈を下すことが難しい作品である。勿論、無理に一義的な解釈を持ち込む必要はなく、多面的な傾向性を孕む作品であることを了解したうえで、道徳的な贖罪の面から、若者カールに焦点を合わせ、その悩める心に触れてみるのも、一つの解釈であろう。

次に、第二作目の戯曲『ジェノヴァのフィエスコの反乱』*Die Verschwörung des Fiesco zu Genua*（1783年）に触れてみよう。舞台は16世紀のイタリアのジェノヴァである。専制体制を敷く統治者アンドレーアス・ドーリアは、貴族からも平民からも敬愛されている老政治家である。しかし、老齢による政治的な手腕の衰えを危惧する声が聞かれる。実は、人々が彼に好感と信頼を寄せていることが、劇の結びにおいて意外ともいえる展開をみせることになる。人々の不満と不安は、権力欲に憑かれた甥のジャンネッティーノ・ドーリアが実質的に治世を取り仕切っていることにある。そして、共和主義者を中心とする平民の間では、ジャンネッティーノの圧政に対する不満から、反乱の計画が密かに進められており、その指導者に貴族フィエスコが乞われる。フィエスコは圧政を敷くジェノヴァの現政権に代わって、平民主導の平和な国家の建設を心に期すが、次第にジェノヴァの覇権に対する私欲を膨らませてゆく。確かに、フィエスコは、「共和主義者フィエスコか。君主フィエスコか」（NA 4,64）と激しく動揺することもあるが、「私はジェノヴァで最も偉大な男ではないか。そして、ちっぽけな者たちは偉大な者の下に集まるのが、当然ではないか。[...] 高尚な頭脳には平凡な頭脳とは異なる欲望があるものだ」（NA 4,67）と自らに言い聞かせて、僭主の座を奪取する決意を固める。それ故、フィエスコが野心を見破られ、共和主義者の手によって溺死させられる筋の展開は、啓蒙家シラーの道徳的精神を告げるものとして理解できる。しかし、フィエスコとともにジェノヴァの専制政体を覆し、共和制の世を打ちたてようとした人々が、最後には革命ではなく、老統治者アンドレーアス

と述べて、シラーの『群盗』創作の意図が道徳的な人間教育にあることを指摘する。
Peter-André Alt: *Schiller*. Bd.1. S.301.

¹⁵ 内藤克彦『シラー研究。第1巻』。東京（南江堂） 昭和47年、82頁以下。

による専制政体のもとでの改革に希望を託して、従来の体制下での生活に戻ってしまうことを、どのように解釈したらよいのだろうか。人間の心に潜む野心を炙り出しはするが、社会・政治体制の変革を描出することもなく、この戯曲は幕を閉じ、歴史の展開における空転を示す。まるで、専制政体を容認するかのような結末の付け方に、驚きを覚える。シラーは、劇中で老政治家アンドレーアスに寄せる人々の敬愛の念を劇の結びの伏線として配しているように、フリードリヒ大王に代表される所謂啓蒙君主による政治改革や社会改革に期待を寄せていたのだろうか¹⁶。本論の「I はじめに」で、『人間の美的教育について』の起稿の契機がアウグステンブルク公の経済的な援助に対する謝礼の意味もあったが、支配層の人物にシラーが彼の人間形成論を説いていることについて寸言したが、『ジェノヴァのフィエスコの反乱』において、共和主義者や一般の人々が採った身の処し方の描出に、フランスの革命集会から顕彰された自由の戦士シラーとは別の一面を見る思いがする。

三番目の戯曲『たくらみと恋』*Kabale und Liebe* (1784年)では、青年貴族フェルディナントと町の娘ルーゼとの悲劇的な恋の顛末が描かれる。この戯曲は、題材が全く作者シラーの詩的構想によるものであり、シラー自身の見聞や体験が随所に織り込められていると解せる作品である。戯曲の筋の展開において、貴族の能動的な性格と平民の受動的な性格が、それぞれの階層を代表する人間的性格として浮き彫りにされる。戯曲は、音楽師ミュラーと彼の妻が娘ルーゼの恋の行方を案じる場面で始まる。ルーゼは宰相ヴァルターの息子フェルディナントから好意を寄せられているが、身分ある者に我が娘が弄ばれているのではないかという、親心が描出される。何事にも受け身の姿勢で、小心翼翼として生きている平民の生活に、貴族の青年が割り込んできたのである。黙することを強いられ、また黙することで生き延びてきた平民の心が、ミュラーを通じて見事に描出される。ただし、身分の卑しい者といえども、自分の家族を守るためには毅然とした態度を示す。宰

¹⁶ 参照。カント著『啓蒙とは何か』に次の一節がある。「私たちがいま啓蒙化された時代に生きているか、と問われるならば、その答えは、否、しかし啓蒙の時代に生きている、である。[...] いま、そこへ向けて自分自身を作り変える領域が人々に開かれており、一般的な啓蒙の障害と、自分自身に責任がある未成年の状態から出てゆく障害が、次第に少なくなっていること、このことを私たちははっきりと示せる。この視点で、この時代は啓蒙の時代、即ちフリードリヒの時代なのだ。」I. Kant: *Beantwortung der Frage. Was ist Aufklärung?* Kant Werke. Darmstadt 1964, Bd.6, S.59.

相ヴァルターは息子の恋人ルイーゼに制裁を加えようとして、彼女の家へ乗り込んでくる。しかし、権力者の威圧的な振舞に対して臆することなく、ミラーは「ここは私の部屋でございますからなあ。そのうち何か陳情書でも持参いたします折には、平身低頭して御挨拶を申し上げますが、ただし無作法なお客なら、さっさと戸口からつまみ出してしまいます」（NA 5,43）と言い放つ。権力者に対して、自分の家庭へ土足では踏み込ませまいとする父親の姿に、シラーは平民の逞しい生きる力を凝縮させている。

確かに、身分の差に囚われることなく、己の愛の心を買こうとする青年の姿に、身分制度や偏狭な因習と闘う革命の戦士を読み取ることもできよう。そして高貴な身分も、将来の栄達もかなぐり捨てて、平民の娘との恋の成就のみを一途に求める青年の姿に、喝采を送りたくもなる。しかし、この青年の言動にもう少し注意を払うと、この青年が恋人やその父親、つまり平民の心をどれほど理解しているかについては、はなはだ疑問の余地が残る。フェルディナントは、支配層に属する人間の特性ともいうべき能動的かつ支配的な性格そのままに、他者の心を思いやることができず、また引くことを知らず、己の願望だけを訴えてもいる。それに対して、常には受け身であった町の娘ルイーゼは、恋の受難を通じて、自らの意思を発現できる女性に成長を遂げる。フェルディナントに向かってルイーゼは、「あなたは、あなたの愛以外に、もはやなんの義務もお持ちでないのでしょうか」（NA 5,56）、あるいは「町の人々の生活の継ぎ目をばらばらにしてしまうような、皆の永遠的な秩序全体をこわしてしまうような縁組を諦めさせて下さい」（NA 5,57）と諫止の言葉を投げつける。いまや、ルイーゼの苦悩の原因は、身分制度によって、フェルディナントとの恋が妨害されていることよりも、フェルディナントの恋の暴走にある。フェルディナントは、身分制度に代表される封建的な体制や因習との対決において、身の破滅を恐れずに、大胆な行動を示し、あくまでも現実の世界でルイーゼへの愛を買こうとする。一方、ルイーゼは現実の世界での幸福に執着することなく、愛の醇化と永遠化を信じて、心の幸福を求めて現実の世界で生きようとする。心の無限な飛翔を求めながら、現実世界での生をも重んじるルイーゼこそが、当該戯曲の真の主人公である。

確かに、シラーは、心の自由、生きる自由を求める青年たちの姿を描き出している。私たちがこれらの青年たちの行動への決意に深い感動を覚え、また果敢な行動を示す彼らに己を重ねあわせ、心が熱くなるのを感じる。しかしそれとともに、「天の法廷の裁きの剣」（NA 3,65）を司ろうとした盗賊団

の首領カール、「高尚な頭脳には平凡な頭脳とは異なる欲望があるものだ」(NA 4,67) として野心の正当化を図る青年貴族フィエスコ、そして「僕を信じろ。おまえはもはや天使を必要としない」(NA 5,14f.) と恋の世界で支配者の役を演じる宰相の子息フェルディナント、彼らの思いあがった心に、シラーは裁きをつけている。カール学院生シラーが「愛、人間の魂のなかで最も美しく、最も高貴な衝動、感受する人間と人間を繋ぐ偉大な鎖、それは私自身と隣人の存在の交換以外の何ものでもない。そしてこの交換が喜びです。それ故、愛は隣人の楽しみを私の楽しみにし、彼の苦痛を私の苦痛にする」(NA 20,11) と述べていることが想起される。シラーが説くのは愛の絆による社会の構築であり、「心の交換の喜び」を等閑にしてしまった青年たちの生き方には、決着がつけられなければならなかった。

さらに、シラーの思想的な発展をうかがわせる『ドン・カルロス』においては、シラーの人間啓蒙の思想がもっと明確に表れ出ている。この戯曲は、16世紀スペイン絶対王政を舞台に、王家の家庭悲劇と政治的革命劇の傾向を示す。展開されるテーマの一つは、義母エリーザベトに寄せる思慕の念に苦悩する王子カルロスが、友人の革命家ポーザ公との友情を介して、コスモポリタニズム的な世界観を抱くに至る道程が描かれる。もう一つのテーマは、ポーザの政治思想の開示にある。ポーザは「全人類の代表」(NA 6,16)、「来るべき未来世界の民」(NA 6,185) としてカルロスや国王フィリップの前に立つ。特に、宗教裁判制を後盾にして、王権神授説を掲げて絶対王政の頂点に立つ国王に対して、ポーザが彼の政治理想を説く場面は、当該戯曲の圧巻の場の一つといえる。ポーザは、「国民の幸福と王侯の力が仲よく手を携えて歩み、つつましい国家は国民を大切に扱い、やむない掟も人間的なものになるでしょう」(NA 6,189)、と君主制国家の理想像を描きだし、さらに「ヨーロッパの王たちに先んじてお進みください。陛下ご自身の筆による一筆の布告がありますならば、この地上は新たに作られるのです。思想の自由(Gedankenfreiheit)をお与え下さい」(NA 6,191) と懇請する。『ジェノヴァのフィエスコの反乱』における結末のつけ方と同様に、賢明なる君主による統治を、シラーは認めている。『群盗』でみられた猛々しいまでに激しい社会批判や体制批判の精神は弱められている。

さて、ポーザは彼の政治的な理想を実現するために、カルロスとの友情や国王の信頼を裏切るような行為にでる。理想的な国家の建設に燃える熱く純真な心を持つポーザといえども、老獪な政治の世界を切り抜けてゆかねばな

らない政治家の宿命だろうか。それ故、心に汚点を孕むようになったポーザに代わって、人間的な覚醒に至ったカルロスが、ポーザの政治的な理想を引き継ぐことになる。革新的な為政者カルロスの誕生かと思われたが、それも束の間のことであり、カルロスは強大で陰湿な力を誇る絶対王政と宗教裁判の手に落ちてしまう。

この戯曲では、カルロスとポーザの他にも私たちの心を捉える人物が登場する。王妃エリーザベトは特に輝きを放つ。ポーザによって「天性の静かな輝きを浴びて、憂いを知らぬ軽やかな心を持ち […] 彼女はほどよい中庸の道を歩いている」（NA 6, 143）と絶賛されるように、エリーザベトは、自由なフランス宮廷に育った女性に相応しく、美の象徴として描き出されている。彼女はポーザと連携の上で、思慕の念を寄せるカルロスの心を国政、ひいては人類の至福に向けさせる。また、国王フィリップ二世が見せる王座に坐する者の孤独な姿と猜疑の渦に巻き込まれた姿も私たちの心を打つ。「この戯曲が痛ましいものであるならば、それは国王フィリップの状況と性格によって生じるに違いない」¹⁷と述べるシラー自身の言葉からも、国王フィリップに寄せるシラーの強い関心がうかがえる。

演劇を「実践的な智慧のため学校」（NA 20,95）と考える若いシラーにとって、劇の筋の展開は人生模様の縮図を描出することによって、人間的な生の確立に向かう歩みを教示するものでなければならなかった。シラーが青年時代に創作した戯曲に登場する青年たち、『群盗』のカール・モール、『ジェノヴァのフィエスコの反乱』のフィエスコ、『たくらみと恋』のフェルディナントは、彼らを取り巻いている社会から受ける不条理な抑圧や固陋な因習、そして人々の精神の腐敗を憤り、硬直した社会の仕組みや、そこに逃げ込んでいる者に対して、己の情熱が駆り立てるままに、失われた人間性の回復を旗印に果敢な闘いを展開する。しかし、彼らは偉大であろうとする余りに、神の代行を勝手に決め込んでしまう。しかも、そのような越境行為は、往々にして、人間に課せられている職域を踏み外してしまうために、彼らの意に反して、かえって人間性を傷つけてしまうこともある。しかし、私たちは、彼らの言動に対して、私たちの怒りや不満を重ねあわせては、共感を覚え、かつ称賛の拍手を送り、また彼らが陥る悲劇的な結末に対しては心からの同

¹⁷ Schillers Werke. München (Winkler-Verlag) 1968. Bd. 5. S. 766.

情と慙愧の念を禁じえない。なぜならば、彼らは、熱く純粋な心が先導するままに行動する一途な青年たちだからである。私たちは彼らの心の叫びを聞くにつけて、私たちが生の歩みを続けるなかで、どこかに置き去りにしてきた己の姿を彷彿とさせられる。しかし、彼らが犯す勇み足、己を神の代行者とみなすかのような言動は、若さ故の暴走として許容するにはあまりにもその破壊的結果が深刻すぎる。他者との連帯のなかで生を営む者は、他者の平穏な生を破壊した行為に対しては、その責任を当然に負わなければならない。また、第四の戯曲『ドン・カルロス』は、前三作と異なる展開をみせる。戯曲で取り上げられるテーマは、私的な欲求の主張から公的・政治的な領域へ進む。確かに、戯曲の導入部において、カルロスは義母エリーザベトに寄せる思慕の情に苦しむ陰鬱な青年として描出されている。しかしカルロスは、革命家ポーザとエリーザベトによって、理想的な国家建設の旗手となるべく、意識改革がなされる。ポーザが説く国家論は抽象的ではあるが、立憲君主制の構築を足掛かりに、究極的にはコスモポリタニズムの主張であり、まさに革新的な政治思想の表白といえる。故国を出奔して文化活動に励むシラーの視線は、領邦国家どころか、領邦国家集団であるドイツという枠組みを越えて、世界国家へ向けられていると解せる思想の開陳である。

シラー戯曲が接する者の心を魅了する一つの理由は、複数の主人公に匹敵する人物によって筋の展開が巧みに編まれていることにある。複数の重要な人物の配置は、シラーの一樣でない心の表白かもしれないが、私たちは、何処かで、私たちの分身に出会えることを心待ちにしている。

(シラーの後半生における戯曲の創作活動と人間形成の思想の展開については、本論の続篇で考察を続けたい。)

(まつやま ゆうぞう・独文学)

本稿は科学研究費補助金(課題番号 21530785)の助成を受けたものである。